

国語

1

出典

長田弘『一人称で語る権利』〈9 街の暮らし〉(人文書院)

解答

問一 (1)ーア (2)ーウ (3)ーエ
問二 イ

問三 オ

問四 ウ

問五 エ

問六 ウ

問七 ア

問八 エ

問九 イ

問十 ア

問十一 ウ

問二 傍線部の「そう」は「駅は街のなかから非常に遠かった」ことを指す。次の段落に「むかしの駅がそのように遠くにつくられたのは……街の暮らしというものが、駅を中心として動く動きかたをひつようとしていなかったからでしょう」とある。ア、「閉鎖性」は「暮らしが街の中心にある」ことの結果として挙げられているが、それが新しい交通手段の拒否につながったとは書いていない。ウ、「不自由な生活」への慣れ、エ、「街の規模」への言及はない。オ、「東北の小さな城下町」だけでなくかつての街一般の話である。

問三 「クルマ寄せとしての意味」は、暮らしが「駅を中心として動く」（前段落）ために「駅の役割」が大きくなる（傍線部の二文後）という現在の駅の意味を指す。また、「街に住む人びとの広場」とは傍線部後に「わたしたちじしんの広場」、「誰にとってもコモンズとしての場所」と言い換えられている。「コモンズ」とは、誰もが自由に利用できる共有の土地^①という意味。前段落の「人びとによる利用権が私有権にさきだつ」とは、私鉄・国鉄の私有権よりも人びとが自由に利用できる広場であることが優先されるということなので、イは不適切。

問四 「わたしたち自身」がずっと「交通手段にたよった暮らし」のままである理由を答える。段落冒頭に「駅の例」が示すのは「わたしたちの街の暮らしのありかた」だとあるので、その前にさかのぼると、かつての「暮らしが中心にある街のありよう」が、「駅なしには街の暮らしがなりたたない」ように変化したことが述べられている。このことが説明されているのはウのみ。ウの後半部は、次の段落の「交通機関に歩く行為をすべてゆだねたきり」「歩くという行為がみうしなわれた」をまとめたものである。

問五 傍線部の「そうした同心円的な感覚」は前段落で述べられている「いつも中心からどんどん円をひろげてゆくという同心円的な発想」のこと。傍線部の次の文には「わたしたちの社会の意識……社会像が根を張っている」とあるので、エが適切。アは「方向感覚」に限定している点で誤り。「同心円的な感覚」を適切に説明できていない。イ、第六

段落の学校での話は同心円の感覚が常識となっている一例にすぎない。ウ、「社会への思い」としてしている点がまず不適で、また「歪んだもの」だという評価はしていない。オ、「同心円的な都市」のイメージは「かつての国益優先の時代」に限定されない。

問六

傍線部の「街とはいえない」とは、傍線部後の「じぶんが『街のなか』にいる」感覚がない状態を指す。それは「じぶんで歩ける街の日々が街の暮らしの中心をなしてはじめて」もたらされるとある。ア、三つ前の段落で「交通機関に歩く行為をすべてゆだねたきり」の暮らしの見直しを提案しているが、「移動のためだけの空間を失くす」とまでは言っていない。イ、傍線部の段落の市場の話は一つの例であり「市場に身を置くことでしか得られない」とはいえない。エ、「自分に見合った空間」「作り変える必要がある」とは述べていない。オ、「同心円状に拡大する中心」を持った都市のありようは「ちいささ」を持った都市のありようとは異なる。

問七

傍線部後に「横浜市民であるとか……自治体の身分としての『市民』という言葉はありえても、そこに一人ひとりが街の暮らしをもつ一人の自覚をこめて『市民』という言葉をじぶんのアイデンティティの根拠としてもつということ」が根付いていないとある。「アイデンティティ」については前段落で「『街のなか』に住んでいるという感覚」を持つことで得られると読み取れる。また、最終段落で「いまのわたしたちの街の暮らし（＝傍線部(c)次文「交通機関に歩く行為をすべてゆだねたきりのいまの暮らし」）の負うその不確かさ」が「街」ではなく「国」にアイデンティティを求めるような感覚をもたらししていると述べられている。

問八

第一段落で「駅を中心にして街がつくられてゆくようになって」「暮らしが中心にある街のありよう」が失われたと示される。傍線部(b)の段落で駅は「commonsとしての場所でなくな」り、波線部(x)の段落でクルマ信仰によって「歩くという行為がみうしなわれた道」が発達したとされる。続けてそのことによって「一つの方向にむかって流されて疑われないような社会の意識」が形成されたとする。その後の二段落で昔からある「同心円的な都市のイメージ」が、社会の意識のなかに「一つの中心」をおく社会像がもたらすことが示され、それに対して筆者は傍線部(e)の段落

「じぶんで歩ける街の日々が街の暮らしの中心」をなすこと、「じぶんが『街のなか』にいるとおもえる社会」、波線部(Z)の段落「『街のなか』に暮らしているのだという自由な感覚がとりもどされなくちゃならない」とする。そして最終段落で「国民」ではなく「市民」としてのアイデンティティの確立を主張するのである。

問九

波線部の「ありうべき街の暮らしが問われる」とは、段落初めの「交通機関に歩く行為をすべてゆだねたきりのいまの暮らしを……変えてゆくこと」が問われることである。波線部の「このこと」とは直前の「みずからの『足』をもたない生きかた、暮らしかたというものを不断に生みだす構造をまぬがれないまのじぶんたちの街の暮らしかたを、どう変えてゆくか」を指す。これはその前の「一つの方向にどんどん……流されて疑われないような社会の意識が、絶えず実感的に社会的につくられてきている」ことによってもたらされたものである。ア、「歴史」について知るのではなく、社会の「構造」をもたらずものを考えることが必要。ウ、「交通機関……危険を回避する」ことが目的ではない。エ・オ、ナチスは顕著な例の一つであって、まずナチスの検証を必要とするわけではない。

問十

波線部「そういう同心円的感覚」とは、波線部前の「いつも中心からどんどん円をひろげてゆくという同心円的な発想」のことであり、これが「都市のありよう」を決定し、「価値感覚」や「方向感覚」を根ぶかくささえている＝根本的な源となっているのである。

問十一

波線部の「いかに『じぶんの街』として生きられるか」という問題は「ぬきさしならない」（＝身動きがとれないほどに深くかかわっている）ものであり、波線部後の「『街のなか』に住んでいるという感覚」を持てるかどうかという問題である。

問十二

ア、第一段落に「閉鎖性」を生んだのは「暮らしが街の中心にあるという街のありよう」とある。イ、アウトバインにそうした意図があったとは述べられていない（波線部(X)の段落）。これは「一つの方向にむかって流されて疑われないような社会の意識……つくられてきている」ことが顕著に表れた例である。ウ、持っていないのは「市民」としてのアイデンティティである（最終段落）。エ、傍線部(c)の段落の内容に合致。オ、井伏鱒二の小説は駅中心の時

代のものであったというだけである（傍線部(b)の段落）。カ、傍線部(e)の段落の内容に合致。

2

出典

鳶野克己「序論 物語ることの内と外―物語論的人間研究の教育学的核心」（矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界―「物語ること」の教育学』世織書房）

解答

問一 (1)―オ (2)―イ (3)―エ

問二 エ

問三 ウ

問四 ア

問五 オ

問六 エ

解説

問二 I、段落初めに「教育における『大きな物語』の終焉」と述べられており、空欄以後はそこを受けて、「大きな物語」が終焉したとしてもII「小さな物語」が復権したとしても、「物語的制限を免れているわけではない」という流れで続く。II・III、空欄後の「もう一つの意味づけ」とは前段落の「身近な諸々の出来事から出発して、それらのもつ時間的空間的な結びつきをその内部から広げ厚くしていくことを通じて」見出される「生きることの意味」であり、「大きな物語」に依拠できなくなってもたらされた。

問三 第一段落初めに「教育に関するこれまでの意味づけ方や理解のあり方を律してきた『大きな物語』としての理念や思想の失墜や終焉」が現代の状況として示される。その代わりに「身近で具体的な人間関係」などを通じて紡がれる「小さな物語」の意味を解明する姿勢に変わったというのが傍線部前後の流れである。これは第二段落でも「生きていくことの実感」を取り戻し、「生きることの意味」を紡ぎ出すこととして説明されている。ア、「親子関係」に限定

している点が誤り。イ、「教育」における「大きな物語」の説明になっていない。エ・オ、「理念や思想の失墜や終焉」をきちんと押さえられていない。

問四

傍線部は直前の「物語の『大・小』の問題を突き抜けて、全体を見通した筋立てのもとに出来事を意味づける」とをうけている。また、前段落に「『物語』であるかぎり、出来事を時間の流れに沿って筋立てて意味づけ、私たちが生きる営みとして納得し理解することが可能な形でまとめ整えられなければならない」と、「物語」の本質について述べられている。エ、「人間形成の肯定的な意味」とは第四段落の「教育についての意味づけ」（＝教育の正当性）のことであり、「小さな物語」によってそれが支えられることは否定されていない。

問五

傍線部の「物語ること」は直前の「出来事を筋立てつつ意味づける」という行為であり、空欄Ⅰ～Ⅲの段落でそれは「私たちが生きる営みとして納得し理解することが可能な形でまとめ整えられなければならない」と述べられる。つまり「大きい物語」であれ「小さな物語」であれ、自分が納得しやすい形に作りあげているものである。それに向けられる「自己反省」とは、傍線部(b)の段落に「『物語る存在』としての私たちの生き方が抱え込んでいる問題性……を看過することはできない」とあるような、「私たち」自身のあり方に対する反省である。ア～エは「物語る」私たち自身への「反省」の説明となっていない。

問六

傍線部の「(教育を) 物語ることの不思議さ」とは、前段落の「このとき私たちは、『物語ること』の不思議さと出会っている」を踏まえた表現であり、「このとき」とは、『物語ること』自体へと向けられる不断の自己反省」によって、「筋立てることのすべてを根源から揺さぶり続けつつ自己自身を語る、いわば『物語の異形』が現れる」「この『異形』の出現は……『物語ることの外』に触れる瞬間」と説明されている。このことを「教育」に即して説明したのは、エである。オは「筋立てから排除された『物語の異形』」という説明が、前段落の「筋立てることのすべてを根源から揺さぶり続けつつ自己自身を語る、いわば『物語の異形』」という説明に照らして誤り。

解答

問一 ア

問二 (a)ーエ (e)ーイ

問三 エ

問四 イ

問五 ウ

問六 ア

問七 オ

問八 (一) 1ーア 2ーオ 3ーイ (二) 1ーウ 2ーカ 3ーア

問九 (W)ーウ (X)ーイ

問十 ア

問十一 オ

解説

問一 (1) 「たまふ」は尊敬語であるので主語を敬う。一行目から、初瀬詣でをするのは尼君であることがわかる。

(2) 「はべれ」は会話文中の丁寧語であるので会話文の聞き手を敬う。(2)を含む会話文は2～3行目の尼君の初瀬詣での誘い掛けに対する返答なので、女君が尼君に発言している。

(3) 「のたまふ」は尊敬語であるので主語を敬う。(2)の説明より、女君が主語となる。

(4) 「たまふ」は尊敬語であるので主語を敬う。尼君が女君の歌を見つけてその中の「二本の杉」という言葉について、「またも……(＝再びお逢いしようと思いなさる人がいるのだろう)」と発言しているのだから、女君が主語であ

る。

問二 (a) 「年ごろ」は、^レ長年、数年^ヲを表す最頻出の古文単語である。

(e) 「具す」は、^レ一緒に行く、連れて行く、持って行く、備わる^ルなどを表す古文単語である。

問三 尼君にとって「恋しき人」なので、リード文の「亡き娘」だと判断できる。傍線部(b)の後の「かくあらぬ人ともおぼえたまはぬ慰め」もリード文の「この女君を亡き娘の身代わりのように思っている」に対応している。ここで、尼君の詠んだ「ふる川の……」の歌に着目すると、下の句「過ぎにし人によそへてぞ見る」が^レ(この世を)過ぎ去った人に重ねて見えています^レという意味となるので、「過ぎにし人」が亡き娘のことであると判断できる。アは女君にとってまだよくわからない尼君、イは初瀬詣でを断った女君、ウは女君がお逢いしたいと思っている人、オは左衛門という年配の女房のことである。

問四 「やは」は、係助詞「や」が反語の意味となりやすい形である。苦悩の果てに入水をしたという過去のある女君を初瀬詣でに誘う際に、「誰にも知られることはないでしょう」と言うのは内容としても適している。

問五 傍線部(d)「かやうに」は直前の尼君の発言「さやうの所に行ひたるなむ^{ためし}験ありてよき例多かる」を指している。「行ふ」は、^レ仏道修行・勤行する^ルという意味の動詞、「験」は、^レ効果・靈験・ご利益^ヲの意味の名詞、「例」は「ためし」と読む時は、^レ前例、先例^ヲという意味の名詞である。すると、尼君の発言は、^レそのような所で勤行する^ルのがご利益があつて幸運になる前例が多い^レという意味である。以上に合致するウが正解。エは「観音は尊いところで功德を積んでいる」が不適。オは「往生できるようになる」が不適である。参籠の目的は往生ではなく、現世利益である。

問六 かつて母親や乳母に誘われて行った参籠の効果もなく、まだよくわからない尼君について行く旅にも不安を感じる女君が、尼君に返答した様子が傍線部(f)である。傍線部(f)の直後で「心地の……(＝気分がとでもすぐれませんで、そのような道のりもどうだろうかと、気が引けて)」と、気分がすぐれないことにかこつけて断っている。以上に合

致するアが正解。ウは前半は適当だが、「自分などには祈る資格がないから」が不適。

問七

傍線部(g)の1行前の「二本は、またもあひきこえむと思ひたまふ人あるべし」という尼君の発言が原因である。リド文にもあるように女君は二人の男君から求婚されている。そのことを言い当てられたことで恥ずかしがっているのである。ウは「会いたい人にはきつと会える」が不適。

問八

(一) 「得」は、数少ないア行の動詞である。活用形は直後の完了の助動詞「たり」の接続から連用形である。
(二) 「おはせ」は活用の種類を暗記しておくべきサ行変格活用の動詞である。

問九

(W) 「れ」は未然形に接続していることから、受身、尊敬、自発、可能の助動詞「る」であることがわかる。直後に打消の助動詞「ず」の連用形「ざり」があることから可能の助動詞であると判断できる。

(X) 「ぬ」は未然形に接続していること、「ぬ」が連体形であることから、打消の助動詞であると判断できる。

問十

「かひなきにこそあめれ」の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「こそ」は強調の係助詞。「あめれ」はラ変動詞「あり」の連体形撥音便の省略が起きていて、「あるめれ(あんめれ)」が「あめれ」となっている。「めれ」は推定の助動詞「めり」の已然形である。甲斐がないのであるようだ」という直訳になる。甲斐は、かつて母君や乳母に誘われて行った参籠の甲斐である。ここでは自分の不幸な境遇について客観的に捉えているため推定の助動詞が用いられている。以上より、正解はア。イ「そうだ」は伝聞の表現であり、自分の境遇についての判断としては不適である。

問十一

「答へ」は、返事・返歌」という意味である。ここで返歌をしたのは、女君の歌を見た尼君である。「とく」は、早い」という意味の形容詞「疾し」の連用形である。尼君の歌は、女君のことを亡き娘と重ねて見ているという内容なので、女君の詠んだ歌とは内容上無関係である。「ことなる」は、「殊なる」と表記し、特別な、格別な」という意味となる。以上より、オが正解である。

解答

問一 (W) | オ (X) | イ (Y) | ウ (Z) | エ

問二 ウ

問三 ア

問四 エ

問五 ア

問六 エ・カ

問七 エ

解説

問一 (W) 直前の部分との対句関係に注目すると、「此」^{こゝこ}に対応する読み方となるので、「かしこに」が正解である。

(X) 「交」は「こもごも」と読み、互いに、一斉にの意である。

(Y) 「これ」と読む漢字は、「ごとし」に返読する際は「かくの」と読む。

(Z) 「所謂」は「いはゆる」と読み、世間で言うという意味である。

問二 二重否定「不^ル可^{カラ}不^ル」は、しななければならないの意である。

問三 傍線部直前は、前文を受けて、中傷が多くの人々に広まったならば、という意味である。その条件と、傍線部直後の、中傷がますます固く信じられるものとなってくる、という文との対句関係に注目する。アが正解。イ、「有識者たち」の「批判」は、傍線部には表れていない。ウ、「当事者」のいない所で中傷が広まっている状況である。エ、「面白おかしく」は、傍線部に表れていない。オ、「内密の話だがと断りつつ」は傍線部の構造から無理がある。

問四 「已」は、述語の上に置かれているときには「すでに」と読む副詞となる。ここでは文末に「已」の文字が置かれ

ているので、アのようにには読めない。「能」は、「不」で否定されているときは、「あたは」と読むので、イは不適。ウ、「已」は動詞として読むときは「やむ」と読むので、ウは不適。「已」は文末に置かれた際は、「のみ」と読む。「不能」の読み方も妥当であるので、エが正解。漢文の修飾関係は、〈修飾語＋被修飾語〉の語順となるため、「救ふ能」と読むのであれば、「救能」という語順でなければならぬ。よって、オは不適。

問五 傍線部(d)以降の内容を踏まえる。〈よく省みて考え、中傷の理由を察し、判断すれば、中傷は次々と広まらない。だいたい終息したといえよう〉という内容から、アが適当。

問六 ア、中傷の原因については、本文一・二行目に複数並列されているので、「専ら憎い相手を陥れようとする邪悪な心」とはいえない。イ、「荒唐無稽になりがち」に対応する表現が本文にはない。ウ、「中傷はその内容がひどいほど」が不適。本文では、〈中傷が一度伝わると、多くの人に広まる〉と述べている。エ、傍線部(b)を含む一文に対応しているので正解である。オ、「内容の異同を検討することで、真相を究明できる」は、本文にはない解決方法である。カ、波線部(z)を含む一文に対応しているので正解である。キ、智者にできるのは、中傷が広まるのを防ぐことであり、「なかったことにする」ことができるわけではないので不適である。

問七 「而」が置き字となるときは、「而」の前後の述語をつなげる接続詞のような働きをする。上の述語を読んだ後、下の述語を読むので、「易」を読んだ後、「伝」という述語を読む必要がある。よって、エが正解。ウは「ざる」に当たる文字が傍線部には存在しないので不適である。